

発表タイトル	配給制度における天津住民の日常食生活に関する考察
発表者所属名	地域文化学専攻
発表者氏名	劉 征宇 (リュウ セイウ) LIU Zhengyu
<p>背景と目的</p> <p>1950年代中期から、中国はほぼすべての食品を配給制にし始めた。その政策が実施された約40年間(1955～1993)は、全国の都市住民は様々な配給券また購入証を使って穀物や肉類、食用油や卵類などの日常食を定量的また公定価格で購入していた。こうした歴史背景をふまえて、本発表の目的は、天津市を事例として、配給制度下で住民の日常食生活を考察することである。</p> <p>調査方法と内容：</p> <p>1) 資料調査：国会図書館及び東洋文庫図書館において歴史資料を査閲し、近現代における天津地域の食文化に関する情報を収集した。(平成26年度文化科学研究科学生派遣事業・2014/6/11～6/21、東京)</p> <p>2) 現地調査：天津に現地調査を行った。具体的には、文書館や図書館などにおいて資料査閲の作業を引き続きしながら、日常食生活に関する情報を世代別に聞き取りした。特に、陳氏を訪問し、配給券と購入証などの収蔵品を撮影してデータを記録した。さらに、天津地域の食の老舗を訪問し、店長、料理人や店員にインタビューを行った。(約3ヶ月半・10月8日～11月2日、11月10日～20日や2015年1月11日～3月22日)</p> <p>考察</p> <p>巨視的にみれば、社会主義前期(1950年代～80年代前期)における天津住民の日常食生活の風景と内容は、トウモロコシと「雑穀」を代表とする主食とハクサイをはじめとする通年野菜や少量の肉・卵類を中心とする副食をあわせて構成されており、「菜多肉少」や「飲食清淡」(油っこくなく・薄味)といった特徴があった。しかし、現在の食生活と比べると、ほぼすべての高齢者のインフォーマントは、「昔の食生活は苦しかったが、懐かしい」と評価した。特に、昔の食生活について「食材の量が不足になったが、質がよかった」、「食材のうまみがあった」及び「食事が安心・安全」などの評価があった。そのため、配給制度における都市住民の食生活に対する再認識が必要である。さらに、昔の食生活に関する個人的な経験は現在の食生活にどのような影響を与えるかを検討することも必要である。</p> <p>参考文献</p> <p>高橋宏幸 2011 「1950年代の中国流通体制に関する一考察」、KIER Discussion Paper No.1110, Institute of Economic Research, Kyoto University。</p> <p>張英莉 2004 「新中国の戸籍管理制度(上) —戸籍管理制度の成立過程—」、『埼玉学園大学紀要(経営学部篇)』第4号：pp.19-32。</p> <p>「市鎮糧食定量供応暫行弁法」、「農村食糧統購統銷暫行弁法」『人民日報』1955年8月25日第二版。</p>	